

## はじめに

本編で扱う時代は、第二次世界大戦後の連合国軍による占領期から平成二十八年（二〇一六）までである。ただし、現代が現在進行の時代という観点を考慮し、町史編さん事業完了年度である平成三十年についても可能な限り記述した。本書の編さん目的が、昭和六十年（一九八五）に刊行された『町史 改訂版』より後の歴史を埋めることに主眼を置いた関係上、昭和六十年から現代にいたる歴史に重点を置いて記述したことを断っておく。なお、本編も第四編の近代と同様に、分野ごとに記述を行った。行政的な区分になったことは否めないが、分野によっては近代から続けて読むことが可能なように組み立てたつもりである。

第一章は行政・財政・議会である。まず、戦後復興期から町村制施行による昭和二十三年（一九四八）五月三日の「三股町の誕生」に触れた。時代が移り、平成の大合併の時期においては、本町が単独町制を選択した経緯が詳述されている。平成十六年（二〇〇四）二月九日に本町を除く一市四町（都城市・高城町・山之口町・山田町・高崎町）が合併したが、本町は平成三十年の時点においても単独町制を続けている。単独町制を選択した評価は後世にゆだねることとし、将来の本町の方向性を模索する際には本書がその一助となることを期待したい。第二章は産業であり、第四編第二章（産業と交通）との連続性を考慮し、記述した。本町の産業の基幹である稲作から書き起こし、畜産や林業にも触れ、観光資源の紹介も行った。

第三章は厚生・福祉であり、本町も例外ではない少子高齢化という課題に対して、行政としてどのような取り組みを実施してきたかを述べた。その拠点として平成十七年（二〇〇五）四月に建設された三股町総合福祉センター（元気の杜）の記述が『町史 改訂版』との大きな違いであろう。第四章は保健・医療であり、国・県の取り組みを始めとして本町での具体的な施策を紹介した。特に、町立病院についてはその誕生から

終焉までを記述し、町立病院が本町にとってどれほど重要な存在であったかが述べられている。

第五章は衛生・環境である。現代において環境問題は地球規模として捉えられており、本町では特に水環境の保全が産業とともに重要であり、それは河川との格闘の歴史でもあった。特に沖水川に関して、稲作における水利事業とともに河川の浄化に相当な年月がかかっている。廃棄物（ごみ）の問題も深刻で、町民の住環境に大きく影響する問題である。第六章は土木・建設であり、住民にとって住みやすい町づくりや交通網整備の取り組みを述べた。本町の都市計画マスタープランは平成二十九年（二〇一七）に公表され、未来に向けての都市像を示すものである。本書も本町の未来の都市像構築の一助となることを期待したい。

第七章は治安・消防・防災であり、町民の生命・財産を守るために本町がどのような取り組みを行ってきたかを述べた。また、山林の多い本町における防災対策や台風の常襲地域である歴史にも触れた。第八章は交通・通信・エネルギーで、三股駅については第四編第二章との連続性を考慮した。さらに交通面では平成十九年（二〇〇七）四月から運行されたコミュニティバス「くいまーる」を紹介した。

第九章は教育である。第四編第三章で明治初期を「文教三股」の萌芽時期に設定したが、果たして現在が開花時期にあたっているのか、まだまだ試行錯誤の段階であるのかは後世の評価にゆだねたい。教育問題は時代とともに多様化・複雑化しており、本町がそのためにどのような教育行政に取り組んできたかを詳述した。また、教育は人間にとって生涯かけて必要であるという観点から生涯学習・生涯スポーツ・文化芸能に触れ、「アスリートタウン」「文教の町」としての今後の発展に期待を寄せた記述となっている。

本編を記述するにあたって最大の問題は史料不足であった。そのため十分な史料批判や研究の蓄積に基づいた記述になっていないことは否めないであろう。また、すべての分野に関して記述できなかった点も史料不足が原因といえる。本書刊行をきっかけにして史料保存の重要性が認識されることを切に望む。